里見八犬傳

拾七編

巻四十五

へ18
709
96

南總里見八犬傳第九輯卷之四十五

東都　曲亭主人編次

第百七十五回　南弥六靈を顯して子を祐く　礼儀時を失ふて時ふ爲と有り

その日文明十五年。十二月八日の曉天。甲斐の武田信昌の代軍をうける。武田左京亮信隆。隊欲まるよりあれば。定正の衆艦と共ふ纜を解めらる。胡意波上遠ふ後れて。那隊あれ従ふ。浦河の漕ふ猫児を下ぬ。悄地ふ順風を候ふ程ふ天ハ稍明るんと思ふ時候成わ。夫の勁風起りて。是空九竟と舵工们ふ下知して前面ふ在る鋸山の麓路投て漕ぎふ正ふ相模ふる浦河より。上總の鋸山ハ最近くて。水行二里ふ過ざるふ順風ふ儘ふ便宜ふあるれば。一瞬間ふ其衆艦。件の浦邊ふ果ふけり。當下信隆。艦と棄て磯ふ登りて。隊の兵を皆従へて。悄地ふ山路ふ分ち入りて。已ぶ故の城地ふ廳南へ赴ふ地方の

遠門 13
號 709
巻 96
明治三六年十月九日購求

民も知らざりけり。この夕後ふゆえけり。話分両頭。その日洲崎の陣中の荒磯南弥六が身後の螟蛉児なる磯崎増松が其実父堇野の阿弥七と椿村の隊士八と共侶ふ。烽火臺の加役ふ充られて件の吉室下ふ在りけるふ遥ふ眺亘を洲崎の漁の水戰ハ自家十二分の大勝利を。焼盡さる。寄隊千百の戰艦の燬を免るゝ者稀ゆく猛火と做りて。波上ふ煽々たる光景ハ寇戍る巩石の海る。不知火も似なるべく。敵の衆兵身を焦し。炯裏ふ叫ぶ聲ハ焦熱地獄の罪人の呵責もかくてそあるべけれと思ハ毛骨竦然く。人皆駭くそ中ふ増松ハ総角ゑれども。性として武勇を好めば自家の士卒の勝ふ乗る。挿紀を呈次ゑて。親と隊士八ふ咽く。我們烽火の加役とて。その処ふ居れども。自家既ふ戰ひ克て。敵又寄せべくもあらざれば烽火を颺く急を報るとあるべくもあらざるか。船を乗り出して。焼残りる敵の船を流さで拿も留むべく。且水ふ溺れて命を殞す。敵の亡骸を拿揚るば。中ハ那衆隊る。大将品もゑらぎや。然ぶ仁慈を旨とゆふ。館へ致ス忠信を。ゑと空くまて這臺下ふ在らんハ優るべ。ハ議を思ひぬぎやと言光実達く談ずと。何弥七急ふ推禁めて。ハ亦要る。挿ゑ入汝ハ尚総角ゑれば。館の憐を思ひ食てその加役ふ做されふ反く。御軍令ふ違ひるば後の御咎と。争何ハせん。無用々々と。君れハ隊士八も亦ハの意を好として。俱ふ不の字とハ。従ふべくもあらざれば。増松ハ思ふ。ハ思ふ。と思ふ。ハ。争ひ難て。黙然として在りける程ふ。敵の衆艦ハ燔盡され。閉戰克る。自家の勇士ハ敵の殘兵雛舫ふ乗りて。命を涯ふ逃去る。と。猶脱さ。快船と。漕走らせく。赴ふ程ふ。洲崎の澳る。兵燹火絶て。敵の乗棄し巨艦の。戎ハ過半焦るあり。戎ハ舟底のみ殘るもあり。波濤の揺動々々。漂ふ。増松遥ふ眺望て。今那艦と。食らぎもあらば。孰の時を。ちんや。と思ハ。心焦燥て。連りふ嘆息ゑ。折ふ。天津九二四郎貝明ハ。戰飯餽の所役果て。聊暇を。ゑ。

その日の水戰を見まく欲さふ伴をも俱せぞ劍太刀身に身甲ふ鉦脛衣ゐて這頭の浦邊ふうち出ぐ舊家老隷の老僕詰茂佳橘と相俱ふ料ぞまくふ來ふけるふ增松等三人とを前日洲崎の陣営ゆ義成主ふ見參の折迭ふ面戎認まくあれが增松に狹びてのまぶ口誼も果ざるふ件の意衷を恁々と告て好歹を請と向へ九三四郎駭嘆て噫和郎に年尚十五ふ足らぬ里の総角なりけるふ恁ろ忠勤を思ひ起せ〻に恐らく南弥六の靈憑くいかなるぞあらん我も亦低弱ヨリ病ゐる主君の與ふ館今番の従軍を許さぞのぞ絶ふ是戰飯司の蛭児所約ぞ。ありけると本意なきとのを思ひふ今日に偶暇あり。いでや和郎と共侶ふ那海上ふ焼残らくる敵の艦を含集へて那亡骸をも曳揚て然ども這情願を先館ふ請まりて御免許を禀るふあらぶ軍令を破るふ似さ。とのひつ後方をとろへるく爲よ詰茂和老に昨日堀内嗣文ふ從ゆく御陣ふ參り在るて幸ひれ。

情由に目今听れ如ーいくぐ增松と咱ぞ與ふ堀内王ふあの美を告て館の御免許を請ーのひね。爲よいをだてよ。憑むぞよとのふ佳橘に異説もるくそをゐる館倘御許容るぐ小可走ゐて又來て來ぞに障りるー。と思ふて去向とのそだのひひ。と答て急ふ增松と阿弥七と隊八等ふ揖をまく君ぐ在を陣所を投て走りけ。尓程ふ天津九三四郎に。あの烽火臺ゐる本番の頭人ふ增松等ぐ情願と目今詰茂佳橘とりく館ふ請まりてせるゆさへふ箇樣々々と告知せく這臺下ふ維れる快船二艘と釣児桴索さへヨく求ゐて。開ぐ一船ふ增松と阿弥七とうち乘せ。又一船ふ隊八と九三四郎うち乘ゐ俱ふ艣を推て艇を操りて漕出ぞふ皆是上総人なれが波の上自由ゆく暴風激波をものともせぞ。又只這四個両船のそるうぞ烽火臺の頭人に尚総角なる增松ぐ忠勤を賞感して。俱ふ他等と帮助んとそ。別ふ快船十艘ふ雜兵百十數名とうち乘せ。

増松九三四郎等ふ従はせーゐ増松九三四郎等ふの日の捧ぢふ便宜と汲て焼
残りゐる敵の巨艦の流るゝを迂留め曳綴して這方の磯ふ維ぐ者勘ゐ又釘
児とめく海と搦そ両敵の亡骸を索るふ自家の士卒の戦殁い稀ゐ。敵の火ふ
焼れ水ふ溺れる屍骸い数多ふ盡べくもあらぬ有恁ー程ふ扇谷の先鋒の小頭人
水禽隼四郎緑林錦帆八四九郎近範い原是海賊の頭領なれば水戯至妙の
本事あり。ゐくとも。敵ふ艦と燔れー時倶ふ水中ふ火を逸れて波濤を被げども敢死
ゐぐ既ふく其艦い焼亡て流るゐ板子と抱ぢ身を浮せて波濤のまふく流れて在り
焼残りゐる艦ふ逢つ。ゐち乗く逃れ去らぬと思ふめゐゐ亡目亀の浮木ふ似てあゐと
かゐく海廣く波暴けれ。ゐまざ便宜と汲ざーふ烽火臺ゐる加勢の雑兵们い船より
是を見ぢて是も亦敵狄自家の軍兵の浮屍骸ゐべーとそゐふく釘児と倉ぢ変て
極よせく船ふ載ーゐ緑林と近範い倶ふ方の便宜と汲れども猶も死ーゐる面色ゐ

ぢく一雨襲時氣力と頓ふく共沿ふ御と身を起き其威勢初ふ似ぢ腫ふ残りー大刀
引抜く船ゐる敵の雑兵を斫仆ーゐ斫仆せば。ちちゐふこだゐふ驚ぢ噪ぐ餘の雑
兵も中ゐる者ゐく散動ぢて痍を負ふ者ぢ多くゐける當下天津九三四郎い隊八と
只二人別船ふ乗く在り今ゐの異変ふ驚ぢて倶ふ船を漕ぢ去く。件の船ふ
乗得りて。ぢれ白徒卒小ゐ。ぢと喚禁めく刀と抜ぢて水禽隼四郎緑林
と刃と交へく一上一下と聲をうけく殺結ぶ程ーもあらぬ増松も亦是を見く吐
嗟とぢゐ親何弥七と共沿ふ九三四郎と援人とて船と這方へ漕りて来ぢを
錦帆八四九郎近範いとも是を見ゐく増松ゐ童年ゐると侮りて敢又物
とも思ぬぢ近つく隨ふ其船ふ躍て閃りと乗得ゐると何弥七い無せ。ぢそ械りく延
ふを近範い隻脚を飛ーゐ蹴仆ーて又増松を敷ゐんとそ振晃めゐ刃の電光それ
ゐあゐ反狄近範の目前ふ燈と起ゐ陰燐の光りふ近範憶ぢ眼と射られく苦と

ちろり
ゆみ七

ゆみ六郎
まつ松
増松勇を奮ふ両刀敵を撃

叫びつゝ兵々とゝ程に増松ゆるりと力を抜て轂ろりて鋭く近範が右の拳を斫落
其ば近範怒ても猶弱らず左の手をのばし増松に組んと拭ひを還返して鎧の綅を
撲地と斫る手裏冴ろ窮所の深痍に近範竟に堪難て瞬間居に撞と平張
倒りて脚を悶撥て死ぞけり。尓程に又一艘なる天津九三四郎員明は水會隼四
郎緑林と刃を交へて刀尖より火出るまでに戦へども緑林素より猛者にして武藝
剽姚凡庸ならねバ員明危ふくりければ椿村の墜八は倶に刃を打振々々援けて連
りに挑み戦へども緑林威力壮にて右に中り左に拄る最も劇しき大刀風に員明も亦
墜八も身に負ふ痛痍に堪難き墜八は憶ずも腕乱れ拄難てはよく危ふくりける
程に又只磯崎増松は今剛敵を撃捕りしかど蹴られて滾びし親阿弥七を勦り
慰るに暇あらず又員明を援んとて、いそがはしく船を漕よするに既にして員明は只受
大刀に做れるのみ。吐嗟目今撃る果さるべく見えしかば増松心焦燥て間はいまだ近か

らぬ水を隔て船より船へ閃りと跫入る自得の剽姚緑林是に驚きて見かへる処を
丁と斫る斫られて緑林一霎時も得堪ず刀を棄て仰さまに撞と顛べば員明は起かへり。
と刀を拿直して聳しく蒐りて刺んとするを増松急に推禁めて否よ〳〵天津
主權且這奴を活し置ずば其姓名を知るよしも定正主の存亡を誰に訊ね誰に向ん
惴る要あるなればやとふに員明有理と悟りて然らば結束ん為よ隊兵八索もて倶に
手傳ひね。為よとなくいそがせば隊兵八は起かへりやくに痛痍を忍びて身を起して濆緒を
とく。緑林をもて緊しく結束りける然ば又阿弥七も近範に蹴られしのみなれば恙なる
ければ又艪を推々船を寄来て苦戦に勁敵降伏の歓びを舒などす這他加役の
雜兵們が乗る船は間遥に遠かりければ這闘戦を知るもあり知ざりしも稍少知
りて、驚きて聚ひ来て且増松が挿みの抜萃るを称賛し大小海に這増
松の本性武藝を好めども素是荘客阿弥七が第二の子にて且寒家に生れ育

たれば敷る剣の技にあも沿学ざりけるふ約莫その日の挿れれ疏此糸の八郎朝鎌倉の源
大義平鞍馬の牛孺丸ふも伯仲ぢ劣る段ある幷をいろふぢと原るふ上の出像ふ見え
たる如く初錦帆八四九郎近範ぢ這方の船ふ移り来て増松危ふ〻し時怪む
べ。其ふ義父荒磯南弥六ぢ在し世の形貌変らぢ身ふハ細鑠の衫甲ふ重鉞
打る肱甲十王頭の脛当して黒金表装の大刀を跨へ忽焉として影の如く立顕
れて近範を遮り禁めて動せぢ身ハ一囮の陰火と倣りて増松ぢ口中へ閃
め入るゝと見る程ふ増松奮勇日屬ふ似ぢ武藝剽姚向ふ前ふ矢場ふ勁
敵近範を斫て両段ふ做ゝ又緑林ふ疵を負せ。輒く他を生拘して且
九三四郎と蒙八を拯ひ出る戰功ハ則是南弥六の霊の致ぢ所と〻を九三四郎蒙
八を夢でゝ〻ぢも是を知ぢ只阿弥七のみ近範ふ蹴られて仆れゝ時ふの奇異を
認めとふ其言分明るのみ〻ぢ増松ハ那時ふ眼光さへ聲音さへ南弥

六ふ肖ざるとゝ〻ふ心術猛可ふ大人備れハ誰ゝ非とて疑ふ〻ぢ員明を首ぢ
八並ふ加役の雑兵都てふの奇談ゝ少知る者ふ〻ぢ感嘆して那南弥六ぢ義侠
ふ。死て後も霊亡ぢ冥助と其子ふ〻ぢ伏姫神の亞るべ。と稱て美談
ゝ〻ける然ハ亦幸ふ九三四郎も蒙八も其疵穴所ゝ〻ハ疼痛甚ゝ〻ぢ倶ふ
汗衫の袖を列て其疵口ふ巻ゝ〻ぢ却緑林ぢ責て〻の両個の姓名と定正
存亡と問ゝ〻ふ始ハ左右ゝ〻ハ〻ゝ〻ぢ〻ども深疵の上る故ふ堪ねハ則其身と
近範の姓名出処又定正ハ憲儀后綱ふ援けられて。小舫ふ乗りて逃れ去
ゝ〻ぢ〻ふ又只ハ〻ふ〻ぢ加役の船ふ引上る。敵の屍厳ゝ〻ぢ中ふ扇
谷の先鋒の頭人大茂林小彦濱川小渡ふ〻の餘も有名の士ゝ〻ぢ誰も
知る〻ぢ〻ふも亦ふの時緑林ふ見せ〻ふ稍是を知ることゝ〻ぢの時自家ふ
諸軍兵ふ燬を免れ敵ぢ対ざるもゝ〻ぢ〻ハ這頭ふ在るべくもゝ〻ぢ獨軍師大

阪毛野が一隊の戰艦數十艘の洲崎の澳ゑ猶見を下ろく。二番時士卒を
馳へく奪ひ相距ること二三十町ゑ過ぎれば九一四郎増松們いまの爰を軍師ゑ告
んとて則生口水禽隼四郎緑林並ゑ錦帆八四九郎近範大茂林小彦和中
濱川小渡銭久弓の首級亡骸と船ゑ載く漕ぎく其里ゑ赴くと言傳くと
委曲を聲く且生口緑林と近范弓の首級と軍師の実檢ゑ入れ給へば
賞感大ひに躍て九一四郎増松阿弥七蓬八弓ゑ對面き其戰功を誉て
且ゆく就中宮くが如く増松が武勇抜群る是併其義父南弥六の神灵の
致む所歟義士の侠魂死ーて亡びぎ実ゑ感ずるゑ餘りあり我い徑ゑ武藏へ渡ーく
敵ゑ脚を止さむーと欲む沒弓ゑ久蛛く洲崎の御陣へまゐりく俱ゑ功を奏ーて
ぞれ我も亦勝軍の義を告ぎーんとて隨即両個の老兵ゑ課ぜく注進状とまね
らまるゑ増松弓が戰功の美事さゑ寫載くり慫而件の老兵弓ゑ増松弓が

船ゑ乘て俱ゑ洲崎の港口る望洋臺ゑ赴く程ゑ生口緑林い深痍ゑ堪ず七
船の内ゆく死ゑけり然い渝智の隊の頭人小森高宗千代丸豊俊浦安友勝木
曽季元弓ゑ内ゆく後ゑ件の奇談と听く者義成主を首ゑく七大士四家老諸頭
人雜兵奴隷土民荘客婦女童蒙ゑ至るまで感嘆ぜざるゑいるくけり。不題ゑの
日の曉天ゑ大村大角礼儀い料らずも新井の澳ゆく三浦暴二郎義武ゑ抑留
せられて艦の前後と爭ひ已まず角口ゑ時移りく天い明ゑと為る時候洲崎の澳
ゑ両敵の鬪戰起りぬと為ずくて猛火遥ゑ天ゑ升りく餘煙這方へ靄靆ぬけり。
以ある哉初い勁風乾ゑーゑ其風猛可ゑ吹変りく既ゑ弭ゑ倣りくれいるり大角
これを瞻仰く原来鬪戰那圖ゑ當れり今ゆく世盖の口論ゑ時を移さず期ゑ
後れん兵毎艦を疾遣らぬと喚りく刀を拔て敵の檝く艦の鈎索托地と斫
拂へば堀内雜魚太郎貞住も勇る聲と震起く士卒と呂り促ーく敵の檝

文溪堂藏

たる鈎索を斫拂ひ又斫断せて漕ぎて去らんまく欲もれば義武愈怒を忍堪び
噫烏滸の白物毎非如管領家の兵ども烏合の野武士を魁せられく何を
のて面目なせん兵毎先那百中を殺さ捕らく蝕く水路を開ぎ喚り嗟る聲と
共に競ふ新井の三頭人水崎蜑人甲良亀九小磯真砂五八舵工を下知して
一瞬間に二十餘艘の戰艦を獨樂の像く漕繞させて大角ゞ十艘の船を送
る捕竜て殺さんと找むと大角い敢又物ともせず四下に响く武者聲立高く義武
聞れ我烏滸ゆんや若们反く烏滸技まゞ我豈赤品百中るゝんや実ち里見
殷肱の臣是八犬士の隨一人犬村大角礼儀と我定正を謀り給く你ゞ親義
同に艦を借りゝに要あるゆゑ今朝ゆも寄敵の背より火を放さまく欲せ
ゆく你に抑留せられて那期に後れ腹壓に今先若们を衂ゆて新井の城を
攻捕てんみづから其愚を知るるゝば兜を脱て降らむゆとらせも果ゞ義武ち

且駭れまもく怒りて原来里見の間諜児に欺れゝそ悔ゝけれ兵毎先其大
角奴を捉へく又蝕く牽りて来ると脚踏鳴らゝて焦燥ども既に新井の隊の兵们い
思ざりけるこの敵を里見に名高る犬士の一人犬村大角礼儀と名告るを聞きて
ゝ驚ゝ勢ひ折けく左右るく找まゞ義武らく焦燥くみづから鎗をとり振り
うち振り近つく敵を刺仆せば水崎蜑人甲良亀九小磯真砂五等も是に氣を
給く漕寄々々艦を連りに找れば惴雄の壯佼本事ある老兵さへ各先を爭
ふまゞに或い敵の船に乗移り或い又乗移られて連りに挑戰ども礼儀ゝく兵を
用れば小勢ゆく反て撓ゞ負住も亦衆に先ゝちく蒼戟突戰術を盡せば
義武隊兵三倍ゝて驍男向ふに前るゝも勝を取るゝ易くゝれば雌雄を分
ざる折ゝ洲崎の漢る兵駭火八風のまゆく吹散されてあへも亦飛ゆるあり既に
ゝ一團の敢火閃て新井の船る柴薪に燧と降かる程ゝもゆゝ其船忽

地猛火と做りく。防ぐに術なく士卒等は吐嗟とばかり驚噪ぎて。焼れて死るも
ヨマラ多べし。然ハ暴戒を祝融の祟ハ又只是のミなるそ。其火四下に飛移りて義
武の隊の船と燔く若五六艘に及びぬ。甲良亀九郎小磯真砂五郎水崎
蛮八士卒も倶に辛く他船に乗移りく。遁れ去らく欲せしを大村大角堀内貞
任艦を風上より相找めく。士卒を駈て攻戦ふ大刀風烈しくりければ。敵の頭人
亀九郎。蛮八真砂五士卒等。各痛痍に堪難く首を並べく俯ぬ。
或ハ海へ飛入りく。死活を知ざるもヨマラ。當下二浦暴三郎義武ハ火の慌
ぎ敵の怯まぎるに少く士卒を罵奬して。近つく敵を刺仆す闘戰ふに劇きて
其鎗竟に折れしを。火光に就て大角の乗こる船を伝と見くるのでや組んと身を
跳らせく。豕蝨の像く飛入るを大角組せぎ身を反して其身を含くく弓投に板
子の上に投仆せば。自家の士卒折累りく。押へそ索をとりければ義武擒に

ぬるべ。敵の残兵皆降参して。這里も閑戰果けり。登時大村大角堀内貞
住等を召集合くらに。我憶ぎも這禍鬼に拘らひて。放火の時に後まに
今ぞ洲崎の漢に造るとも。六日の菊の倒に要るを思べ。查まるに
大阪の逆謀りし。八百八人の術犯れて。自家十二分の勝軍ぞあるんぞ因て
又意に義同其子の我為に擒に遭りぬと。知らば必怨に堪ぎして。時を移さ
ぎ推蒐まく。合を復まく欲せべ。斗を我切所に埋伏して。敵を破らんるかをべ。
其隊配の箇様くこと言詳に咤に示せば。貞住並に老兵們も皆欣然と諾るで。
俱に隊分を定るに三百個の隊の兵に降名の敵兵を相加へく。通五百餘名に
なりぬ則是を二隊に分ちく。其一隊ハ貞住を頭人とを徒而大角を生口
義武等を猶船に在らせて。士卒五十名をりく守りとまるの他ハ皆艦と棄て。
水際に登り立ち程に天ハ明け。烏鳴渡りて朝霜白く風寒く小程に新井の

城、主三浦義同ハ其子暴二郎義武ガ敢病後を戰ふとゐく今日水戰の先を
甚と〻隊の軍兵を引くと思難く再宿も沼せでありける時候
近習等ガ慌〻く枕方ホ来て告るまう目今澳の方ホ丁りて猛火の光り雲ホ入
ちく中天ホ映まると告る者のいひ〻と船火事ぞうんと見る程ホ郷高ホ郎君ホ従
ひまつりて州崎の戰場へ赴ゐ〻頭人甲良亀九郎と其隊の雜兵両三名
倶ホ痛痍を負ゐら城門を敲ゐかへり来て火急の注進ひと告ろと義同ゆ
も果さで横児反復〻岸破と起てそれ安ゐ〻風ホふて先我听ん袴をのちれと
いそぐ〻立ち身装〻て大刀を佩ゐる燭を秉まる近習をそぶ伴従へく蝟く
廣樣ホ立出く其頭の雨戸を開まれば召ぶを遲〻と甲良亀九従ホ雜兵共
侶ホ身ホ刀瘡濡鎧の吊腿重げホ庭門より走り入りて地上ホ坐れば義同
殊く聲と被く〻やとれ甲良亀九郎ぞろ許ゐ其身の刀瘡故〻そあらぬいふ

ぞやと問へば答て然ンい郷高ホ御艦と貸ゆひとる那赤品百中ハ扇谷の加勢ホあ
らぞ実ハ里見の犬士と呼ゑて犬村大角ホそゐた然ハ欺ゐく借ゐる柴薪をそ
寄隊の艦を焼盡さまく欲せ〻ホ我郎君ホ抑留せられて合期せざれば怨ホ沼
堪ぞみぐらう実の姓名と告りて開戰ホ及〻ホ洲崎の方る兵船火の最も強ま
蜚散り来て我艦ヨく焼〻ゐ是より自家利を失ひく輙ぞう者甚ぞう且
郎君の御武勇ゐるも御病後ゑれ甲非文ゐりけ弓折れ勢窮りて竟ホ擒ホあり
ゆひ及ホの他小磯真砂五郎及水崎弥事人ハ戰殺せ〻欲生拘られ欲開ハ知ぞハ
ども惜ゐる身の存命て何容々〻とかへるまあり〻いぐ志を報ぞうんと思ゆ
ぞうホひひゐと勸解〻息と嚏と吻けば雜兵も喘を止めてゐより上ホ里見ぞうれハ義
同いよく怨ホ沼堪ぞ原来赤品百中ハ里見の犬士でありけるよ鈍くも那奴ホ謀〻そ
ヨく士卒と喪ひ〻のミゆ〻ハ我子と擒ホせ〻れハ武門の恥辱ホ上やある遠くハ

去りて新蒐く飯ふく怨を雪ん疾陣徇して人馬を聚へよいそぎくと近習多を推立遣りて慌しく其身い奥へ退沈て時を移さず戎衣して眉尖刀引提て廣縁へ出て来る程ふ素より武備ふ暇しうて家風ふ従ふ勇士猛卒皆犇歩と擐甲あそ蝟く廣庭ふ聚合ふ者甲乙百名許なるべ。尚聚ぬもまうきとども幷ぶ名ぶ武ふ勇ぶ義同い馬をとせさそ躍て内りとうち乗りつ後れ者い迹ようかとせとりい乗て馬ふ拍れて開く正城の鐵門より橋を渡りつ驀直ふ馬頭上を投て走らまれば従ふ兵皆後れじとそ喘々ふ続いける。偖而三浦義同い怒ふ発せそ表向をいたげば敢前後と見りへ駆馬もけまたりい猶奮かりし心地して只管ふ走らまる其路いまぐ幾程ふらまを左右ふ深く鬱り立る冬樹の凍遺を過る時思ひけまを左右の限より發ち鉄砲の響ると共ふ忽焉と喊聲大く起りてるれも間ふ鉄鳴筒叫敵の前後ふ驀ち乱しく頭れ皆る両隊の軍兵左のうとより大村大角右のうとより堀内貞住士卒と駈て突然と鋭尖ふ鎗尖当るふ前ふ虎豹の威勢驚ふ噪ぐ敵の衆兵を刺伏し又撃破り四下ふ响く聲も虜しく愚るかを三浦義同結ふ就く鳥穿ふ入るを獣ふ異ふそ尚戰まく欲するや命惜くば降参せよ犬村大角ふ在りまを。と名告りけく推捕笛ふる八面勁雄聊も透あるとるければ義同い辛くまを。綃一方と殺辟ふく馬を非ずて逃走れば況や士卒い立脚もるく或い敵ふ生擒られ或い命を免れんとく降参ふ好るも甚しうの故ふ義同い一騎辛くして城内へ逃笛りく猛可ふ橋を除せ城門を閉させて大息吹てぞ居とりける。

第百七十六回　禍福反覆して三士功と同くも追兵屢逼りく忠臣主を極ふ

却説犬村大角礼儀い既ふ十二分ふ謀りて戰ひ勝ぞとのふとるければ。權且路ふ士卒を憩へく。腰戰飯を披まるふ敵の馬さへ獲とりーらべ秣と索めそ

餌せるども。登時大角が悄地ふ貞住ふ談まるやう。我やて三浦ノ義同親子い阪東一の勇将ノあるふふ敗績二度ふ及ぶい其智足らざる所以ゑれだ。あの勢ひと脱くべうらぶ我今義武を奉ゆくあれて。城ふ澁て徒々ていん義同其子と思ふの故ふ城を遺與ーて他郷ふ去らべ。そう自他の幸ハあり。他義の與ふ子と兼て殘兵をのそ防ぎ戰つ別ふ計策をのくく城を抜くべ。先義武を奉せあとのふ貞住ふろ級果て。隨即両個の雑兵を舊海邊へ走せて義武を守護の士卒ふ告て。那身を召よせけるあの時大角の隊の兵ゑ二度の降人を相加ゑそ約七八百名ばかり敵の乘奪ふる馬さえ沿ゑれば大角と貞住い騎馬ゑそ義武を奉せて。新井の城へ推寄ゑる。隊伍齊々整々ゑう。徒而大村大角い新井の城ノ正門ふ造りて馬を駐めつ塹を隔て伝と城門を瞻仰れば。其意と汐ゑる一二の従兵聲高ゆふ喚ゑるゆう。誰ら在る。當城の人々ふめいい人里貢ゑの防禦使犬士の一人犬村大角礼儀求れり。當城の主三浦殿ふ對面ーて。説試んと思ふ。姑且矢丸を飛ばべ。あの弦を主へ伝達せよ。ゆう。ふくと喚門へば正門を守る頭人ゑうち。ゆう先陝牕より透ー見て。且驚ゑ且慌て。隨即草占八郎勇ゑ頭九郎と喚做ゑる。両個の小頭人をゆく義同ふ倭と報ーゑば義同一乘妻時沈吟ーて莞介と笑ゆ額を拊ゑ。両個の小頭ゆふ呻くゆう。開ハ又幸ふ。我今城樓ふうち登りて大角奴と問答せ。時鳥銆銃を隠ー持ゑ他ゑ由断を報ゑべ。只一丸ゑそ怨を復さん。ゑれども間近ゑふ報ゑ外ーゑば後悔あらん。若们い新參ゑそ。ゆゑ軍陣ふ倶せざれども。ゆゑる日武藝云を試ーふ弓岩卯火銃何ゑれとゑく人ふ勝れー本事あれば。倶ふ銃砲を携乃て我後方ふ従ひ躯れてゆうで那奴を寵報ゑよ。よくせよ。怨ゆべうぶと示ー合せて准備ーつ。ゆそ。ゆて城樓ふうち登れば草占八郎勇ゑ頭九郎も相従ふゑ後方ふ在ゆ。當下義同ハ城樓の窓を開せて左見右見

義武を擒
大角
新井の城ホ
通る

貞住
大角

佞く喚るやうもそれ儘砲児犬村大角你誑詐の計をのく船を借り我子孫
擒ふまそ奸悪兇暴ふ尚飽ぎも勢ふ乗り城ふ迫りて又何事とのいまくるや
と聲高ふ西馬り向へ大角馬を斬際ふ找めく徐ふ答るやう奥州義同・先
よく怒を理めく我ふよりを聞ふ礼儀軍師嵐智の相計ふよりて船を當城ふ
借るとのども稲るべ為るべ但是寄敵の大兵を火攻して扇谷定正主戎
懲さまく欲せふ仙郎義武王懲ふ我を対鬼まて竟ふ閑詐ふ及びより
已とを沼ぎ虜ふく則ちふ牽めく来れり和殿速ふ先非を悔て我を迎へこ
罪を謝しるべ我も亦和睦して義武を返さべ恐ても惑ひ醒ぎして拒こ防
糾を射んとるべ先義武の首を刎くるふ唾して城を屠られ甚麼ぞと問返
まそ義同ハ吹も果さべ怒れる苛聲震起く黙れ儘砲児亟礼へ我を是両
管領の親族ふく武勇をのく人ふ饒されふ愛ふ溺れ子ふ顧く今ゆら里

見ふ従んやとのひく傷ふ引付措たぬ鉄砲を悄と拿揚く只一發ふ大角を
寵愛んと欲まふ火索失くもぎ疾駆むぎもとのひく後方を見久る処を勇ぎ亟頭九郎草占八郎ひと嘆
背より義同の左右の腕を摧るだりふ亟ぎと含く撞と縅伏せ聲一蒐て
宛虎を結扭るが像く緊く索を被しるが義同ハ吐嗟とだりふ叫ぶも其甲
斐ふく索ふかこ折らう殺ふ近習のるべを悔るのこ呆れて眼を睜りく在り
遺恨る方るりけり當下勇ぎ亟頭九郎草占八郎ハ両聲高く喚るやう犬
村主諸軍兵及城内るる人々も耳を傾けく皆よく聞れ當城主三浦義同
とが安房の国藩臣田税戸賀九郎逸時苫屋八郎景能が謀りて既ふ生拘
たり城内るる士卒ども懲ふ主を殺んとそ生さが先義同を結果ぎて且若
们を誅戮せん我隊の兵们城門を開放て犬村主を招待せよと四下ふ呼聲

と共に義同を牽立て、又蚓く城樓と下りまで、刀を抜て義同の頭に楚と摧
當れば、正門の頭人、其隊の城兵、少く驚き怯れて、啓よや、ねねと叫ぶを
敢近つく者いなし。其間に逸時景能の隊の兵十名有餘門を開き橋を架渡
さで、忽く大角を迎れば、大角並に負住ぢい訝り、事の便宜に毫も猶豫
せず、馬を又蚓めく、俱に城に乗入れば、従ふ兵七八百名、義武を牽立て、吶と
嘩、忽く、綱入る勢ひ、崩るく、岳に異ならねば、城内に在りとある、士卒ぢ、齊に驚
噪ぎく、但蟭雛と散ぢ、像く、皆後門より逃去りく、迹に残さまし、婦幼の
號哭ぶのみ、ヨヨとりつと、ゆえしらず、大角先老兵に吩咐て、開と一緒に集合せ、且慰
め、且勦らせて、士卒の乱妨を戒し、城中亟に静まるぬ、徒而田税逸時、苫屋
景能に、生口三浦義同を自家の士卒に渡し、守らせ、且大角ぢに、案内をさ
せ、城の正廳に請れば、大角則、負住ぢと、俱に、躰く、馬より下立て、設の席に

就しく、従ふ老兵武勇の、毎、俱に、鎧の袖を連ねく、左右二側に、羅列れば、徒
而逸時景能に、又改めく、大角と、負住ぢに、對面せしく、俱に、其席に入りしに、
大角に、其の両士の功を、賞て、且のぶ、思ひきや、田税、苫屋和殿ぢに、ある、比蛮崎
十一郎と、共に、京師へ、御使に立けるに、あの城内に、在んとは、神ぞ、ぞ、て、孰り知る
べ、故、て、もあらめ、其、麼ぞや、と、問へば、逸時、先答て、然、て、義に、蛮崎生と、共に、倡に、
水路を、京師に、赴く、程に、其、船、遠江灘を、過る、時、凶類や、凭に、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
波濤に、揺られて、既に、反覆んと、思ふと、屢、ぬれば、誰も、かも、更に、活る、心地せず、皆
死を、極めく、在りける、程に、舵工ぢ、相占ひて、蛮崎と、我に、告るぬ、今、あの、船の、凶
類に、其、生年、壬癸、ぬる、人に、在りて、その、本命の、人々を、擇除く、必、蚓く、離舫ふうち
載く、流し、棄ぬれば、自餘の、人々に、恙もなく、あの、船、又、よく、走るべし、そ、ぞ、ぬ、と
惴立れば、大家、数馬に、憂るのを、默然しる、開ぐ、中に、我、二人、找を、出く、蛮崎生に

向ひくらふやう。他人ハ知ず我們ハ。壬癸の生年ゆゑ月も亦是ハ丁未なれば。その他伴當
夫役ども。必ずこゝろざすべし。這船遊山翫水の為ゆゑ。傷寒あるゆゑ。俱ハ
天命ゝと觀念して浮沈ゝ河伯ハ儘もせん。俱ハ君命を羨りて。京師へ赴
く海上なれば。免れぐ死命と知りて。身を犢性ハ做をを惜まで。其年ゆゑ人を
殺さず。不忠の至りあの上やあり。疾雛舫どうち下りて我們二人を移し載よ。今
隱さとゝろと必死の覺期ハ獎されて。遂ハ其生年の。壬癸ゆゑを告る者伴
當ハ五名あり。舵工ハ六名あり。我們と俱ハ十二名迭ハ別を惜まで下ル雛舫ハ
うち奏れば。蜑崎生もせん銀ゆゑハ只訣別の涙を沃ぐ。其天命ハ儘せゝ現船
公の口占も時ハ稱へ當まる哉我毎十二名別れて雛舫ハ乘りて。凶類立
地ハ鮮ハけん本船ハ風のまゝ。西へ走りて見えぎる反然ばとて。亦我們ゞ乘て
雛舫ハ無復りもせず。回く潮水ハ揺られくて。或ハ東ハ吹紙され。或ハ西へ推流されて。

大洋ハ漂ふと。一日一夜ハ沈ぬ。とへば景能語を續く。恁而其次の日。船ハ人さへ
羨るく流寓りて。三河ゆゑ。昔子崎ハ就りて。港口人ゆゑの邦助ハ因て。旅宿を
求めて。那地ハ在り。漂流の事の顛末領主隣尾殿ハ聞えりて。隨即別船を
以て。安房へ返さべりとあり。りハ漂流難苦の傷れゆゑあり。逸時並ハ伴當
ゆゑ。病煩ふ者ヨヌ。日れば又其醫療ハ日を費して。十二月の初ハ。りー時候逆
時も伴當ゆゑも病着稍癒りて。隣尾殿ハ。亦ハ。船を借ゆゑく還らま
く欲ゆゑ程ハ猛可ハ里巷の風聲あり。扇谷山内の両管領諸侯を連ねく
水陸より。安房上総へ推寄て。里見殿を攻伐ゆゑくとゝハ。其言ゆゑ盃漢ゆゑ。
我們心うち驚れて。借ゆゑ船ハ皆うち乘つ連りハ水路をいそぐものゆゑ。幸ゆゑ
上ハ又幸あり。相模灘を過る時。暴風又吹出く。船をやるべくもあらざれば
已ことを得ぬ。帆をうち下ゆゑ。新井の浦ハ歇りて。當城の番卒ゆゑ訊て。船を

ぞ。こゝに捕へ竜て。堅く来歴を鞫問あけり。登時咱嗟と逆時い悄地ふ示し合さるせう。その地の城主二浦義同い両管領の親族なれば。他も亦我君の怨敵ふ。然いるを今明く地ふ里見の家臣へと名告らば必那るふ殺さるべ。箇様々々ふらんとよけれと思ふ。ろを伴當ものもゐさせく躯て立ちく。却番卒ふうち向ひて。則頼陳むるやう。我们い三河ゐ。隣尾判官伊近の家臣ゐ。勇ゑ頭九郎。草白八郎と唤ひ徴き者ふく。倶しくるい伴當ゑ伊近這回両管領家の里見を攻伐のよしを傳へ聞て。いろぐ加勢の軍兵をまをうきもくう思へども。素より城地編小ゆく士卒ヨヲうぐぶへい。辭し稟せよとある君命ふより。我们則使ふ立く。五十子の城ふ赴く水路ゆく。暴風ふ吹匂引れて。その浦ふ歇りゐんと。実しやふ告らべ。番卒ゐい然もとそ。躯く城へ入ゆくゆたて事怠々と。憩へけり。登時二浦義同い左右ふ下知して我们両個を文注所ゐ局の内へ召よせさせう立ぞ。

其来由と問ふふ。と始ふ殊ゐられば。敢又疑ひを脱る。板歯を顕して。呵々と笑ひく却らふ。隣尾ゐ忠ある志ハ現賞もべきゐれども。若们主僕十餘名ヨヲ寡の知れる人数ゐ。五十子の城へ参るとも。然せる御用ふ立べくもあらで。我折をりく偽達せん。今當城ふ士卒ヨヲうねば。權且ふく留措ん。武芸藝ふ本事あるゐ。前後の門を守るべ。とられて我们推辞ふ由る。開い辱くゐ。武藝ゐ人並ふいへども。何まれ仰付させゐ。仕りゐん。とふふ義同欽びて。次の日又我们両個を馬場ふ召よせく。弓。鉄砲。銃術。何れとく。武芸藝を盡させて試けるふ。孰も正鵠を外さねば。則正門の小頭人ゐ。我兵貌ふ扱使ひ。とふを逸時受續ぎく。分程ふ我们い折を覘ひ脱れ去りて。安房へ還らまく思ふのそ。いまゞ便宜を得ざる。然ば昨夕犬村主和君ゐ。赤品百中と名告く。當城ふ来ゐ。熊借ゐく。時夜目ゐりければよくも見ぞ。姓名も亦異なれば。心もつでありけるふ。當晩

又義武がみづから和君を追止んとて。隊の者ヨヲく従へて。出てゆきしかども思ひと
甚しき猶外事に思ひしより。義武の獍勇なるも病後とはいひながら果敢なく和
君に生拘られて。今朝より牽れて這城に推よせ来ぬる折に及びて。那赤岩百
中は。即里見の犬士なる犬村某甲にてありけりと越に聲て少知りて其ᐩ鉉びに
堪ざれバ。先疾城門を推開きて迎入れまく思ひしかども我腹心の隊の兵すら十
一名に過ざるに慚らバ衍慾あるべしと思難てありける程に。義同火急の拙策なる
拓り出しつ城櫓に登りて。みづから和君と問答して由断を覘ひ鉄砲もて撃
落さんと計りける。その折の帮助にとて咱們二人を従へられバ。心ならずも後方に居
て。義同悄地に膝下に措せ准備の鉄砲の火索を夙く貪ぼりしを義同ハ
知ずして發まくするに火索なけれバ。うち驚きて度を失ひて見えけり。腕を左右
より捉り推伏せて結柮りて牽建ゆいきと迭代の長談偺話に貞住並に

諸士老兵事の便宜ハ態までに幸ありけるよと稱へける就中大角ハ。熟と听果て
逆時と景能の奇功を誉て且いふやう。今翔て少く和殿ばらハ晨裏に御使に立る
が。京師へ沿せず首りにける風濤の艱ミ漂泊の苦ミ此を思ひ彼を懐へバ蜑
崎ハ恙なるや。測知るべからざるねども今ゆ女々あく思ふて益なし。和殿ばら風波の
災なく倶に京師へ参上らバ那御使ハ果すべけれど。今番の大事に遇ざれバ後に
悔しかりけんに。這敵城に抑留せられて洒家と一功を同くなる。禍福ハ糾ふ
纆に似たるも伏姫神の冥助なる欤不測とはいふも餘りあり因て思ふに。和殿ばら
が久しく在りし程。詭詐の姓名も當意即妙といふべし。其故ハ甚麻公とよびし勇も頭
九郎ハ田刀の義で勇ハユに従ひ田に従ひ力に従ふ頭の工なるを。とそれハ田力なるバ
とぞ得らぎ。又草古ハ艹古屋の艹古もくその義ハ誰も悟り易かり。先義同と義武を
その処へ召よせまく我對面してきかまほしくといそがせバ逆時景能ちうる果て。

俱ふ次の間へ退りけり。然ばその時三浦義同義武に里見の十二年ふうち守らきて次の間ふあり。ふが逆時景能の実名実事を送もるく洩伝ーふが啓事て夢の覚る如くいとで悔ーく思ひけり。恁而逆時景能い義同義武を幸立来て。則正廳の簷廊へ程よく楚と椎居れば大角見々身を起ーて先義同と義武を受合るつ。そが儘ふ上坐ふ推登ーて被さる索を鮮んとまると貞任逆時景能ものうち。驚馬ふく板止めく詞弁一諫るつ虎狼の猛るも媚て憐を求る者ハ四足を括られる故ハ況や義同義武い俱ふ旦足武勇ふ富さり。誓力百人を合まへ勁敵るふ甚麽ぞや被る索を饒ーのふ只是千慮の一失欲慈悲も作善も敵ふてそよらめ宣ふ危所行るべーと示を大角ふあへまで不古とよ掛を揚げ角を辟ふく。ヨヲカ光猛の敵とふとも仁義ふよく勝エるー。然ば我君至仁至義の軍令ふ遵申りそ。その親子の索を饒ーハ敵るぐらも

城主る。礼を失ハトと思ふのミ。然るを他も不仁ふーて。暴をのて我を害さば。各て。ふと空くーて他を殺さで見てのミ已んや。然らば他もぐ悪名と永く世ふ貽さんのミ。権且洒家ふ任せゆと諭ーつ。躯く義同と義武の索を鮮棄く。且慰めくふ。成敗い天ん時運の然る所。誰ら和君親子と男ふ。とせ。まども今我為ふ虜ふせられて馬前の奴ふ倣れる者ハ不仁をのそ仁を伐ん。両管領の悪を資けて暴をとるさまく欲せ。故ハ抑我君里見殿ハ行ひ仁義ふあらざるとるー。ちとのく我們まで其仁心を仰ぎ禀て犬阪犬山と共侶ふ。今番水隊の防御使ハ只大敵を防ぐのミヨヲく敵を殺ー長く駐て城を攻め地を畧ーて境を増さとと饒されを然けれども闘戰の常情ぞ。時氣と勢ふ乗るとハい敵の城地ふ馬を繫ぎく我隊の兵の集合ると憩ゆせざるとと必ぞ怪れば其間和君御父子と水路より蔽潘稲村へ送るべー。宅

眷属をも船に乗せ共侶にと思へども婦幼の故らに風濤の害怕あん。
あの故に御達は皆當城に留在せく宜く扶持致もべ。あの美は心易ろ
てん。且里見殿は仁君人和君御父子那地に造り多く敢俘囚をのく見ること
なく礼貌必厚なべ。恁而東西和睦るべ御父子共に當城に返されん
日を偽へく俟べのそあの美も心易ろてんと詞徐に説諭せば義武少
く嗟嘆して默然うく羞る色あり。姑且して義同ろ又ならるもと解く。
腕に拊て答るやうらく趣皆理あり。咱等親子又馬を馳ろと射刀を舞
ろを。年来業とあるのを。文学智術に浅ければ心鈍くも謀られて且盗に
糧を窃し仇に双と借ものぶ。禍竟に蕭牆の内より起ると悟らば城陥
やく。親子梵囚ふるりぬ首を捕れるば幸ろんに豈遥々と安房へ行んや。
願くは情ふそと辭ふを大角慰めく。又逆時景能ふるろるさろ這

親子を別室に移して守せけり。恁而大角は士卒を水陸へ遣して。洲崎の
水戰の勝敗と山内顕定の鎌倉なる館の光景を探らしむる。洲崎の開
戰は寄隊衆艦を皆火攻せられく。自家十二分の勝軍なりと云又鎌倉
なる顕定の館は老黨齋藤左兵衛高実が。水戰の大敗と新井の城さへ大
村殿に攻落されしと吟知りく。驚怕るくと大々さるるべ。躬く主君の宅眷に
倶して館を無蹟を埋めて往方も知くもるりしるべ況や山内の家臣共
誰ら一個も留るべ家火を船に運載く。宅眷を扶く水路より落亡しと。
吟えけり有恁程に三浦四十八郷なる郷士豪民村長荘客共は年来
里見の仁政を慕ふく思ひくべ各々戎衣しく。新井の城に詣来たく。倶に
大角の隊に属く。當城を守らんと願ふ者千とのそ數ふべ。又只是のみにあら
ず。鄙に城と無て逃亡さる。新井の城の士卒们と甲良亀九良さへ帰来ぬ。

箭を折り誓言を做して降を請ふ者城ゐ充けり。ゑとく大角い招ぎて沼
ゐる所七千あまりの隊の兵あり。然ば鎌倉い都會の地ゐく。且阪東の咽喉
ゐる。倘長氏ゐ据られゐ。後々までの害ゐくんとそ。遣即堀内雑魚太郎貞住ゐ
雄兵二千餘名を授けく那地へ遣して鎮守とも貞住叫へ山内の館を陣
営ゐて。民ゐ莅むゐ善政をゐくせらば賊民の乱妨あるとゐ。ゐも大角の
教ゐよりくゑ。恁而又犬村大角いせ古屋八郎景能ゐ課く。あの地の勝軍
顛末と那身並ゐ逸時の奇功の趣を。洲崎の御陣へ注進して生口義
同義武を館へまゐらせべしとそ。隊の兵三百名を授けて。注進状一通を遞
與ちーゐ。景能則快船十艘ゐ従兵を分ちて乗せそ。義同親子と守護
ちゐ。洲崎を投く漕せけり。尓程ゐ犬村大角い。坐ゐ三浦四十八郷を管
領して。善政約いざる所ゐく。村長者老ゐ約ちゐゐ法度と寛くまれども敢

叛く者ゐく。税歛の多りーと寡く含れども調ざる者あーぞ。ゐくとして倉
廩どちら開けく。鰥寡孤獨を賑ーければ民皆其徳澤とち仰ぐて父
母の思ひを做ものゐ。鎌倉及新井の郊外ゐ近属豺狼ヨヌくあり。
夜々人を害ひーゐ礼儀ゐ件の城ゐ在りー日い豺狼皆夜ゐ紛れて他処へ
移らばゐるゐりけり。豈只財狼のゐゐーんや暴主奸相伝人賊民の好ゐそ
良善を殘害して其宍を喫む者も必や憚るべー。実ゐ是孟子の所云
君仁ゐれば不仁ゐー君義ゐれば不義あり。里見殿父子。あの年来約ひ
ゐ善政の枝舗ゐれば然もゐーんとそ心あるも心ゐるゐ。謳歌俚談ゐちち
ける。話分両頭是より先ゐ扇谷定正ゐ。洲崎の澳の鬨戰ゐ犬阪毛
野ゐ火攻せられて命も既ゐ危ふりーと。其田源二兵衛后綱白峯麻生
介廣原弓ゐ枝掖れて辛くーて免れくゑ蝟く雛艘ゐ乗移りて武藏を

投く漕去る程ふ従ふ兵ヨアくゞ。その時同船ゑく左右ふ侍る者ハ大石源左衛門尉憲儀白峯麻生八廣原笹田源二兵衛后綱信城左衛達頼只是のこの餘ハ士卒二百餘名。初五萬五千ゑり付る。大兵ふ比まゞ。什一ふゞも足らねども順風よければ漕脱く。約三時許の程ふ逃水ゑ蛭ゑ武蔵ゑ。河崎の浦ふ船果ゝゝゞ乗棄く陸ふ登るふゑより五十子の城へ。三四里ふ過ぎれども水路と来れば馬いゝゝ。然ゝも總大將の御帰城ふ御歩行ゑへいぐゐゝんと呼く者ゝゝふゑの日河崎の郷ゑ馬市ゑり。牛馬經紀ハヨヌく集會て。馬幾足ゝ數糸ぞくゝゝゝを憲儀見久り熟視て。兵毎那他を見よ。那馬ヨく那里ふ在り捉て舘を乗せまつるべく。我ハもちゝ乗く。五十子へ御伴せん。牽のくゝゑよと吩咐れハ士卒ハ唯々と応も果ぞ走りゑ。聲苛めく。それ馬主毎ゑの馬守の御用ゝ牽のくゝゑと喚りく。絆児を解く五六疋

大奪合んとしければ牛馬經紀ゑ驚く慌く。ゑゑ理不盡ふゐぞや。縦守の御用ゝとも。ゑゑ皆人ふ賣りゝる馬ゝ幷ゝ價ども賜らで召さるゝとゝゐ。といつゝも果ゝ又聲劇く。這奴ゑ大胆不敬ゝ非如千人金の馬ゆもせよ。舘の急ふ召さるゝふ。献らぞば目ふ物見せん。覚期をせよと罵りて。握固め拳の電光右よりも左よりも。毆ゝ仆ゝ又踊躍ゝ。其好馬を五六疋追立々々牽のて来れば。憲儀ハ含笑て。麁悪ゑれども鞍鐙熟も一具ゑれば。尤好卒々とゝゐも先一疋を牽よせさせく。躍て定正ふゝち乗らせて却憲儀廣原達頼后綱もゝゝ乗く。俱ゝて河崎河原ふ造りて。三叉山岸へ渡さく欲ゑふ。船八公ゑハ今の強虐ゝを逆ふ見ゝて。害怕やゑげん。船を風くも漕退けく。前面の水際ふ維ぞく在り。雖喚々々漕のてよまねば。定正連ゝふ焦燥く。ゝく喚べとゝゐぞ。憲儀ハ笑く。怒ふゐ堪ぜ。士卒ハ下知て。

舸公等と。遠箭に被く射て殺れぬと。敦圍暴く罵るを。后綱急に禁めて
曰く。我館の御威徳なるも。聞戰敗れしこの為体なく。御帰城といそがせぬべ
田夫野人の侮りを。御下知に従ひまつらぬを怒らせぬべ。鄙語にふたり児に棒
撃ふ似るべし。敵に足らぬ者と知りて。這里なく時を移しぬる。遠く追来
る敵のやあらん。然ば這河上を。矢口まぐ造らせぬひく。津を求めぬふとも。然
たらば路の遠近をあらぬこの美を思ひぬるぞや。と利害を舒く諫めしが。憲儀い
有理とたらば。答てらまぐ決めぬるぞ。定正是とうち呼く。后綱の意見誠に然
るり。然ば矢口に造らんとて。そぐ俄馬を歩まれば。廣原憲儀ら左右に従ひ
又達頼い先に立ち。后綱い殿して。従に残兵。恍惚るるも馬を遂ひつるぞ
けり。小程に剛才定正の士卒なるに惨く撃仆される牛馬經紀五六名あり。
俱に沙に塗れ頭髪を乱して。身を起しく罵れば。火家の伯樂里の壮佼

数十名走り集りて。情由を問くあり。生所なる。俱に遺恨に堪ざれば。慰めせぐ向
火を附るのみなく。術もなく開き中に馬淵場九郎長連と。喚做る老御者あり。牛
馬經紀仲間の乾父なく。毎に氣を使ふ事を好き侠気ありて。自負む破落戸
なりければ。那理不盡なる。扇谷の士卒を憎むと。大なるに。先撻れる乾児なりと。叱
咤めく且に。紀管領殿の威勢をとめてせるとも。經紀児の賣買東西を奪ふ
誰う美服せん。是等の品は今日のみなる。ぞ上げ上るれば下までも買係ふ。錢を還
さぬ民を虐げく。身を肥したる報ひは今日の敗軍。僅に二百。欲三百の。残兵を従
へく。活路索て渡せられと云。那為体を見ぬ。鏃百まぞの損なれば。厄
落しと思へく。已もせる。圓金の耳と。揃れが賣買なる。活馬と。幾頭か奪はれて
和郎等明日より何をもく。宅着に。廢々と喫まるぞ。疾迂鬼て。食ぬ。遂ぞ。遂曾
ぬも事なるものと。腰脱毎奴と。罵奬せば。是ぞ。勇む牛馬經紀里の壮佼破

落戸事と好むも好奴のまゝ勢ゝ負む似而非武者汰ふ竹槍造作腰刀赤樫の棒稽水牛或ハ纏額縄襷各々たゝ身を固る場九郎を首ふく合殘れ一馬牽よせそうち跨る者五六名大家競ふ开ゞ程ふ武勇と好む被落戸這里那里より走加りく三百餘名ふ高ーゝ低てハ他と對応をべ疾迂蔓よと脚を乱して出と畫て赶こうける有低る折ゝ這津ふ又一艘の落人あり是則別人ゝゝゝゝ曩ふ妙見嶋の柵敗れ七犬田小文吾系檜ふせれ彦別夜ゝ吾數せ之他ハ犬田が慈善を其隊の兵一百五六十名と兵伯ふ扈舟ふ載られく流ー放されこうるふ其船大洋ふ流れ漂ふく或ハ西或ハ東ーて両三日と麻迷ゆる程ふ今日ーも辰巳の追風とゆく。ゝの河崎の浦ふ漂着あけるふ定正の隊の戦艦洲崎の澳ふく敵ふ火攻せられ。其一艦舳頭のを焦く乗れる人ハ一個もゆらを脱棄こる申曽と器械のをとゝまく燔殘りこる水懺さへあるを見ふ扇谷家の戦艦ゆを知ふふ足りち。

原来今日那演ふ鬩戰ありく館定正ハ負させゆく狭と思ふふ月の安ゝゝねば。先士卒西三名を陸ふ登せく這頭の風聲を捞らるふ姑且ーて其兵ゝゝゝ慌ーくかゝ乗ふく箇様ゝゝと告るを听くふ定正ハ殘兵僅ふ二百餘名をゆく方僅ふの地へ脱れゆゝ馬市る馬幾疋狭豪奪させくうち乗て矢口のゝへ赴ーゝ又牛馬經紀们ゝ开を怨く破落戸を二四百名取合て赶く見ーゝ少知る隨ふ告ーゝ數世ハ驚ハ且狭びて隊の兵毎ふ談ゞゝる我妙見嶋ゆハ犬田奴ふ檜ふせられく。大刀戎衣も身ふ添ゞ汝達と共伯ふ這船ふ乗せられて放流されこうーゝより稍ゝの浦ふ寓けるふ幸ゆて自家の焦船同ゝ浦邊ふ流れ来て器械あり戎衣あり各と俱ふ旦足を穿てゝの弓を弯ハこの鎗をゆく館ふ怒ーなるゝ人们を追撃て鮒ふ做をゝゝ先途の恥を雪ゝふ足るべく本領安堵凝ひるー。ゝくせよとのそゞ

せば大家倶に威勢猛く。言れ御伴仕らんと答てゐふく焦艦る所。鎧殘
令て投被々々。縋る表帯上挿の笠前を駈ひ弓を含るもあり。或ハ鎗を挾む。
准備ふ。敷世ふ従ふ其隊の殘兵河原砂
ひふ矢口を投て飛ゲ似くふ追蒐け。小程ふ。扇谷定正ハ貧田后綱ゲ意
見ふ因く。憲儀廣原達頼等と殘兵三百許を拔く。矢口を投くいそぐ
程ふ忽馬として赶歩る敵あり。其兵約莫三四百名。皆没戎衣ゆく。騎
馬五六人あり。ゆくゆくふ器械を引提て馬盜兒を逃まるゝ異口同音ふ喚りて。蒐
地ふ近つくを。后綱佐と見ゆるく。原来那牛馬經紀们ゲ馬を召れしを怨ゑまる
アく。上を怕れぬを法の狠藉天罰思ひ知せんぞ。と罵ゆゲ乘とる馬の鐮
つゝを旋らして来ぬるを屋。と俟ゆ程もるく。現戰世の習俗ゆく。市人
も皆武を好めゲ場九郎们い物ともせぞ。蒐れく。と器械を振閃りて

攻戰ふ。その時后綱ふ従ふく。敵を拄る士卒一百餘名尚寡ゆふあれども
衢ふ水戰ふ火攻せられて辛く命を免れしより纏戰飯ごもあることなけれハ
饑て鬪戰如意ゆゲ。恁る島合の小敵ふ殺頽されて立脚もるく后綱
危く見ゆゲ。定正も亦已とを沼ぞ憲儀廣原達頼等と。従ふ殘兵三百を
找めく。后綱を援んとそ馬を返してうち向ふ浩処ふ一隊の軍兵敵れ
背ふ出来るあり。其兵僅ふ百五六十名皆歩行立るゝ中ふ隊の頭
人とおぼ。猛者鎗挾みて聲高ふやゝれ。藍色児毎礼をせを。管
領家の四家老第一大石石見守憲重の隊長ふ。然る兵あり。と知られる
下總妙見嶋の柵の頭人ゆゲ。彦別夜叉五郎數世ゆふ在り。頭を並
べく刃を受よと名告喚り。威勢猛く。隊兵を蒐て攻破るゝ。貧田后綱
その隊の兵も思ひ掛ぬ援兵ふ。誰ゆ勢ひ勇ざん水母の骨ふあゝ心地して

怯む逆徒を前後より。息をも養ぜ攻ーゑ。馬淵の徒前後の敵ゐ中り
かひて多く斃るゝ。開ぐ中ゐ。頭領馬淵場九郎ハ。其田后綱と鎗を交へて一
上二下と挑戰ふ。修煉拙ゑゐあらねども。其器械竹槍亮ハ竟ゐ尖頭を折
折られく。怯むを后綱やと聲ゑて。胸前禺欵と刺ゐーゑ。沿堪ぜ地上ゐ撞
と墜ち。馬ハ離れて横路のゝへ走れば人も逃迷ひく。斃るゝ者をヨヌりけゐ
然ハ數世ゑ援ふよりく。然ーも剛ゑヨヌ勢の逆徒ハ。或ハ斃され或ハ又往方ハ
知ぜ逃亡く。路の障身の開けーかゑ。大家執ぶそゑ中ゐ。定正ハ今料らゑも彦
別夜叉吾ゑ忠戰をハと訝ーく思ひーゑ。則大石憲儀をハて。騎馬の遺ゐ
召よせて。みゑゝゝ来意を少まくまるゐ。彦別數世ハ憲儀ゐ向ひて稟
まゝう。臣ゑちハゐゐ夜里見の防禦使犬田小文吾悌順ゐ。妙見嶋の柵を攻破
られて。憶ぜ敗軍ゐ及ひーゑ。只得殘兵百五六十名を從て。船ゐ乘りゝ虎口を

脱れて。再戰せまく思ふゆも似ぜ。其船海へ推流されて。一日二日と漂ひく今日あゐ
河崎の浦ゐ船の寄りー時那地の逆徒ヨヌく聚合。館を追蒐まゝんとそ既ゐ打
出ゐゑとゐ風聲ゑまく少ゑーゑ。ゝゝ驚ゑゝく御迹を慕ふ者ゐあるゐ果て
中途ゐ御難義ゐ因て一臂の力を勠せて。御伴の衆と共侶ゐ賊徒を夷げゐ
ゑと実事虚談ゝゝまぜ。今ゐの僥幸の功を負そ説誘る詞ゐまゝ果ざる
折ゝゝ又ゐの河原の横路ゝ。迂蒐束ゐ勁敵ゐ。是則別人る犬山道節忠
與ゝ剛才ゐの地の闘戰ゐ主を喪ひて走り来ゐ馬を捕駐てゝゝ乘る者甲乙倶ゐ
三騎ゐる。左ゐ荒川太郎一郎清英ゐ。右ゐ印東小六明相ゐ。隊の兵一千五六百
名一隊ゐ做て前後を乱ゝ。魚鱗鶴翼ゐ相備て。群ゝる虎の谷を下りそ羊を
遂ゝる威勢振然四下ゐ響く武者聲尖鋭ゝく。達一定正背を見せそ。往る正月
高畧ゐ。伜ゐ頭甲を射て落ーて。舊君の讎を復ゝをゝめゝゝ。道級を捕ぜ

あく盡るに足らねバ飽りとせざりし練馬の舊臣武藏の豪傑今ハ里見の防禦使なる犬山道節金碗忠與なるぞ。忘れハせじ返せくと喚れバ驚き怕る定正ハ怖え憲儀廣原連頼后網數世も倶に吐嗟とだゐる胸を浅せる再度の勁敵免るべくもあらざれバ殘兵四百五六十名を拔めて路を斷塞で敵を河原へ出さでぞ一霎時ハ防ぎ戰へども印東明相荒川清英真先に馬を馳入れて鎗あて敵を刺仆だ武勇に㣲ふ其隊の雄兵哄と噇てこ七二千一に駈敗り又數を乱甘バ然らでも饑る士卒們ハあ勁敵に毅頼されて或ハ瘡を負ひ命を殞し殘るハ風く逃亡て隊斑に分りしかバ數世ハ印東小六に斬れ又白峯廣原と信城連頼ハ道節清英に斬れけり。其が中に獨箕田后綱ハ數ケ所の痛瘡を負ながら只定正を一歩も遠く落さんと思ひしバ近習の壯佼兩三名と倶に踏止り血戰して竟に一騎も免なく者ゐく乱軍の中に皆戰死なそ人に臣なる義を失ハぞ。敵ながらも有の人ありとぞ道節ハ是を譽言にけり。然バぞ定正を漏すべきにあらざれバ暮初る路の晶をを戰ぎして明相清英と倶に馬を態へもあへぞ鞭を鳴らし隊兵を駈て那里までもと赶ふすゐける介程に扇谷定正ハ大石憲儀と倶に主從二騎僅に從ふ近習三名を左右に立せ高津を索ぞて東弓矢口を投て出く程に赶蒐來ゐる荒川清英印東明相二騎の頭人隊兵を拔めて趕馬と人馬の脚响近つきて免るべくもあらざれバ定正に相從ふ三個の近習是も已を得ず引返し相逆へて防ぎ戰ふ發と見る程に怯れしけん然バあらで這頭に隈なき竹藪に潜り入りく逃亡けり明相清英是を見て定正今ハ没脚解らず補ふせんと馬を並へて連に競ふ那時遅し這時速し那恥竹の藪屏を内より托地と推倒して顕れ出る援助の隊長後より續く雄兵四五百人鋭く隊を建固めて鐵砲障なく發出せば銃响烈しかりけれバ明相清英士卒を制めて敢叨に戰ハず當下件の隊長ハ今竹藪に逃入し定正の近習三名を逃しも遣らぞ數を捕りたん鎗の尖頭に串ぬきし其首

ともけとも

河崎河原ハ
道節大ハ
助友と戦ふ
道節

級を振棄て敵に向ひて喚る由。追隊の壯傲弩惴り合せを我ら父人貴灌の密山意に因て隊の兵を招て這地方に来て我君と候給る巨田薪六郎助友と名告も果奴を拆に道節馬を走らせ来て原来助友ぞ。亦那奴は荒芽山の宿怨あり。先那奴より敵を捕ず竟に定正を漏しやせん印東荒川躊躇ふとうは兵毎蒐れと焦燥ば明相清英血氣の衆狂羨り思と応も果ぞ入乱れて戦こけ応。正に是老龍虎魁雌雄と爭ふ豈九庸の闘戰ならんや。一場の大殺戮べし。然べ足曳の山も是ぞ為に鳴動して。群獸走り勇魚取る海も是ぞ為に風燥ぐて。鮮血も流て尋常の段は尚長やうゆく。五卷中ならまぐ日足らぞ。腹稿あきらかるとめく。又三卷を増て腹を結ん。江湖上の諸看官這両雄の勝負を知欲くば。又卷を更めく且下の回に解分ると聽ねか。

南總里見八犬傳第九輯卷之四十五終

○八犬傳第九輯下帙下編之中書画刊剞工匠目次

出像畫工　柳川重信

淨書筆工　谷金川

卷之四十一　高谷熊五郎

卷之四十二　仝

剞劂

卷之四十三　澤金次郎

卷之四十四　仝

卷之四十五　高谷熊五郎

○第百七十六回以下第百八十勝回回外剰筆

首卷全部總目録八犬士畧傳姓名目次共三四卷近日出来

著作堂一夕話 隨筆 大本 三卷 近刻

菅聖廟御傳記 曲亭主人舊作 北尾紅翠齋画 五卷近刻

南總里見八犬傳 共ふ百零一冊 並製本 御誂鳳皮紙揃箱入共出来

本伝一百八十勝回結局剰筆まで一百冊ゆて全部ゆ成りゆ今般八卷ゆへども先彫刻成る所の五卷と發販致しゆ餘三卷も推續ゆ出板願遂有るまゝくゆ是より年々毎集拵出しゆる出来次第発市致す筆ゆ

板元文溪堂敬白

○家傳神女湯 一包代百銅（幼人ちのみちふゆ（へ）ゑ（へ）ゑ（へ）ゑ（へ）血の二流より出る病に用ひてその功神の如し）

○精製奇應丸 一包代金弐朱中包代五十小包代弐十文（某程をえらみ出るもの（へ）ゑ（へ）ゑ（へ）ゑ（へ）病ゆの加減をゆ出るものゆとりてその功神の如し）

○熊胆黒丸子 一包代五十（まのゝ汁をもつて丸ぜもあるべくのりをまぜへぜむ真製なるの）

○婦人つゞ虫の妙薬 一包代六十四文（つゞ虫ハ小ゝ（へ）ゑ（へ）ゑ（へ）ゑ（へ）ゆは用ひてけるまのとられなり）

製薬本家 四ツ谷あるのゝの町 千日谷の上 瀧澤氏

弘所 江戸元飯田町中坂下南側中程 たゞ沢氏

大阪 河内屋喜兵衛 東京 須原屋茂兵衛
同 伊丹屋善兵衛 同 山城屋佐兵衛
同 義賀屋九兵衛 同 小林新兵衛
同 秋田屋太右ヱ門 同 丸屋善七
同 河内屋茂兵衛 同 和泉屋市兵衛
同 河内屋和助 同 須原屋伊八
同 秋田屋市兵衛 同 出雲寺萬治郎
西京 出雲寺文次郎 同 梳屋喜兵衛
同 村上勘兵衛 同 近江屋半七
同 勝村治右衛門 同 長門屋龜七
同 杉本甚助 同 三家村佐平

名山閣 東京芝大神宮前書舗 和泉屋吉兵衛發售